

日本中國學會報 第七十一集
二〇一九年十月十二日 發行 拔刷

武定侯郭勛による『三國志演義』『水滸傳』私刻の意圖

井口千雪

武定侯郭勛による『三國志演義』『水滸傳』私刻の意圖

井口千雪

郭勛（一四七五？—一五四二、字世臣、號東泉・蒼嶠）は、明太祖朱元璋を輔けて武定侯に封ぜられた開國の功臣、郭英の六世孫である（五代目の武定侯を襲爵）。名門たる公侯家の武臣であり、嘉靖年間（一五二二—一五六）には世宗の寵愛を受けて時めき、軍政を掌握、且つ政治的にも内閣首輔と同等の發言力を持つなど、權勢を擅にした。しかし嘉靖二十年（一五四二）、數々の不法行爲、及び不軌（謀反）という大罪の嫌疑で彈劾され、翌年獄中に死した。歴史的には、張瓚・嚴嵩・胡守中と共に「四凶」（堯舜時代の渾敦・窮奇・檮杌・饕餮に擬えた稱）の烙印を押され、巨惡の徒とされる。

郭勛は文學史においても、『三國志演義』『水滸傳』を私刻（家刻、自費出版）した人物として名を知られる。しかし、かくも貴顯の位にありながら、このような通俗白話小説——通常は民間の書坊から商業目的で出版される「俗文學」——を、私費で自主的に刊行した意圖はどこにあつたのか。ともすれば知識人からの蔑みの眼にさらされ得ることは言うまでもなく、『水滸傳』の如き反體制的な思想をはらむ書の刊行に至つては、自身の政治的地位の危険さえも招きかねない。或いは、それらの危険性に勝る確固たる信念と目的が、兩小説の私刻に

踏み切つた背景にあつたのではあるまいか。

この問題は、兩作品の明代後期における受容のあり方、ひいては通俗小説の發展史にも關わつてこよう。

一 郭勛の文學活動——先行研究と史料の再整理——

（一）先行研究

『明史』卷一三〇「郭英傳」の郭勛傳は、郭勛の人となりについて、「架點有智數、頗涉書史」（權謀術數に長け、書史を頗る閱讀した）と紹介する。生平は以下の如くである。正徳年間（一五〇六—一一二）、兩廣（現廣東省・廣西壯族自治區）に駐在し、のち團營（京軍三大營）の一つ三千營を掌る。嘉靖初に團營を掌り、大禮の議（後述）を機に世宗の寵愛を得、嘉靖十八年には翊國公に進む。李福達の獄などを經て廷臣に多くの仇を作り、嘉靖二十年、贈收賄及び店房（皇族等が私税を徵收する茶店・酒店・貸倉庫等の店舗）の不法設置等を給事中戚賢・李鳳來らより彈劾される。この頃、軍役の監査を命ぜられるも赦を履行せず、これを言官に彈劾されると、「何必更勞賜赦」（どうして更に赦を賜る勞をおかけする必要がありません）と非禮な疏辨をしたという。さら

に大逆犯張延齡（外戚）との密通の嫌疑を給事中高時より告發され、世宗の怒りを買ひ、同年九月に錦衣衛に投獄される。世宗には郭勛を宥恕する意向もあり、斬罪を求める法司の議案を留め置いたが、連累を恐れた廷臣には手を差し伸べる者も無く、翌嘉靖二十一年冬、郭勛は獄中に死した。但し不軌の嫌疑が事實であつたかは疑わしく、『明史』卷一九六「夏言傳」に據れば、後に世宗は郭勛と軋轢のあつた大學士夏言が郭勛失脚の裏で暗躍したものと疑っている。

さて、郭勛に言及する従来の研究は主に、『水滸傳』の現存版本の中から所謂「郭武定本」を特定せんとする試みるものであつた（現段階では未發見・未特定）。一方、郭勛の生平や文學活動に焦點を當てた研究は少なく、僅かに戴不凡氏と胡吉勛氏の論考が專論といえる。戴不凡「疑施耐庵即郭勛」（一九八〇年）は、『水滸傳』が郭勛ないし幕下の御用文人によつて編纂されたものであるとする大膽な假説を提起する（本論第四節でも言及）。胡吉勛「郭勛刊書考論—家族史演繹刊佈與明中葉政治的互動」（二〇一五年）は、郭勛の刻書活動を概括した著論である（但し網羅的な調査には至っていない）。

先行研究の問題点を敢えて指摘するならば、郭勛の生平の考證に用いる史料が『明史』にとどまつていること、文學活動の素地となり得る文化水準や社會的コミュニティといった要素には注意が向けられていないこと、『三國志演義』の刊行意圖には全く觸れられていないこと、體系的且つ考證的な研究が少ないことが挙げられよう。

（二）筆者が用いた追加史料と研究成果

— 『千金寶要』郭勛序の紹介を兼ねて —

郭勛の事蹟は『明史』の他にも、『明實錄』に數百條が見える。加えて、左に挙げる史料も重要な研究資料となる。

○郭勛刻『毓慶勳懿集』八卷（正徳十一年序。武定侯家に所藏された文書〔墓誌・祭文、敕・誥券、詩文等〕を收録。管見は國立北平圖書館舊藏本の景照〔東洋文庫藏、II-101470〕）

○寧波天一閣藏明刻本『奏進郭勛案狀』（嘉靖二十年の郭勛獄案に關する奏上・詔諭を收録。管見は『天一閣藏明代政書珍本叢刊』〔北京綫裝書局、二〇一〇年〕第二冊に收録の影印）

筆者は豫てこれらの史料の整理を行い、郭勛の生平と文學活動の背景について基礎的研究を發表してきた。以下に成果を概括しておく。

第一に、郭勛が生まれ育つた武定侯郭家の社會的地位についてである。武定侯郭氏は、武勳を建て且つ皇室と姻戚關係を持つ「勳戚」で、士大夫及び皇帝からも一目置かれる存在であつた。まず始祖郭英の妹は太祖朱元璋の郭寧妃で、魯王朱檀を産んでいる（封地は兗州〔現山東省濟寧市〕。魯王府は南明の監國魯王朱以海まで續く）。郭英の長子郭鎮は太祖十二皇女永嘉公主を娶り、また娘二人は遼王・郢王に嫁し、さらに庶孫には仁宗洪武帝の貴妃郭氏がいる。そして郭勛の父郭良の妻栢氏は、憲宗成化帝賢妃の同母妹であつた（拙論參照）。

第二に、武定侯家の高い文化水準についてである。とりわけ郭英の庶孫郭登（郭勛の高叔祖にあたる）は、緬甸（現ミャンマー）平亂や土木の變で武勳を擧げて定襄伯に封ぜられながら、「國朝武臣能詩者、莫過定襄伯郭元登」（明・李東陽撰『麓堂詩話』）と稱されるほど詩才に秀でた人物であつた。著作も多く、郭勛にも少なからぬ影響を與えたものとみられる（拙論參照）。

第三に、郭勛の豊富な刻書活動についてである。以下に筆者が把握している郭勛の家刻本を、(a)〜(f)のジャンルに分けて列挙する（郭勳刻本及びその重刻・覆刻・鈔本ともに現佚とみられる書は（）内

に記す。刊刻時期のわかるものには小字の注を付す。

- (a) 詩文集…『郭氏文獻集』正徳七年序)・『白樂天詩集』正徳十二年序・『唐元次山文集』正徳十二年序・『白樂天文集』正徳十四年序
- (b) 曲選…『雍熙樂府』嘉靖十年序
- (c) 家傳・家集…『三家世典』正徳十一年序・『毓慶勳懿集』正徳十一年序

- (d) 實用書…『將鑑博議』正徳十年序)・『千金寶要』正徳十一年序・『詩韻釋義』正徳十五年序

- (e) 通俗白話小説…『三國通俗演義』(『水滸傳』)・『國朝英烈記』(一説に『英烈傳』)

(f) 内容不明…(『太和傳』(一説に『太和記』))
各本の内容については拙著にて紹介し、現存が確認できるものは書誌情報・書影の一部・序文の全文も掲載したが、その後、當時傳本を把握していなかった醫書『千金寶要』(臺北國立故宮博物院藏、清末楊守敬鈔本(統一編號故觀〇〇一二九八・〇〇一二九九))を調査する機会を得た。この鈔本の卷首に置かれた正徳十一年(二五一六)の郭勛による自序「重刊千金寶要序」は、現在確認し得る唯一の郭勛自筆の著述である。影印は出ておらず目録に不便な文獻であるから、資料性を考慮して、以下に全文を紹介することにする(句讀點は原本に附された句點に基づく。その他記號、及び改行は筆者による)。

昔人嘗言、達則爲良相以醫天下、窮則爲良醫以醫一方。醫天下者、不可必、醫一方者、係乎人。則醫道恆與相業竝稱者、以其能拯疲癯濟天閼、納斯民於壽康之域也。然勢位懸絕、不啻霄壤、其仁民利物之功、則一耳。顧其爲道幽微玄奧、苟非深窮理學、洞曉

武定侯郭勛による『三國志演義』『水滸傳』私刻の意圖

陰陽、達五運六氣之機、識生尅制化之妙者、又焉能升堂入室、而造夫精微之旨趣乎。

肇自神農作『本草』、黃帝著『內經』、實爲醫道之宗、萬世有賴焉。厥後若扁鵲・盧醫・醫和・醫緩・倉公・仲景・華佗・叔和輩、相繼闡揚其道、皆能起死回生、而聖於醫者。

唐孫思邈不事王侯、高尚其志、以醫聖鳴於時。說者謂邈切脈投藥、如羿之射、奔之棋、無空矢、無敗局、其掌握造化者耶。嘗郊行、見一青蛇爲人擊損、因以藥傅之、置之草間而去。後有黃巾卒、邀邈入海。龍君冕服延邈上座、謝曰、「小兒偶嬉塵世、被牧豎所傷、重勞道者相救、再造之恩也。」遂呼子出拜、乃一絳衣頰毛童也。具席相待、悉水陸珍奇。邈但飲酒不茹葷、龍君問故。邈曰、「行氣耳。」堂下盛列女娥歌舞、邈視久之、龍君曰、「有所欲乎。」邈曰、「外有所觀、內無所欲。」瀕行以珍貝及明珠爲贖、邈再四辭免、一無所取。龍君嘆曰、「眞道者。」乃出龍宮方三十首付之、囑曰、「此天醫祕方、當珍重。」邈受之而還。後邈撰『千金方』、每一證則置一龍宮方。於內曰、「在人自取。」不敢輕泄神祕故也。

正徳壬申、勛奉命掛印來鎮兩廣。地瀕嶺海、歲多瘴癘、士卒罹染者多。心甚惻焉。籌邊機務軫轡中、偶南都詩友彭君大用來梧、出示此書。於是詳檢諦觀、羨其製方簡捷、用藥近易、而取效甚速、與『本草』引用諸方脗合、誠稀世之書、民生日用不可缺者。但石刻經歷歲月之久、風雨剝蝕、字畫漫漶、雖經鑄補、不無魯魚亥豕之訛。於是三復讎校、明白無疑、付之家僮、鋟梓用廣流布、及窮鄉僻邑之人、得觀是集。時或遭疾、偶不遇醫、則因病檢方、因方用藥、人人得以自療、贖復命脈、以永其天年。若然則醫天下之功、雖不敢仰企其萬一、而於國家仁育黎元之意、未必無絲忽之助云。

正徳十一年歲次丙子夏四月望日、
太保武定侯鳳陽郭勛、識于蒼梧之浪秀亭。

最終段落には、郭勛が兩廣駐在時に士卒らの疫病に苦しむ様子を目の當たりにして胸を痛め、この醫書の刊刻に至ったという動機が述べられている。また傍線部の「版刻して廣く流布させ、邊境僻地の人に至るまで、この集を見ることのできるようにする」、「この書の治療法で人々の命を長らえさせることができたなら」國家の黎民を仁徳で以て養わんとする意志にとつて、僅かの助けにもならぬことはあるまい」という言葉からは、この出版事業に對する一種の使命感が感じられる。郭勛は、人民の生活を向上させるために、有用な書物を廣く天下に行き渡らしめようという志を抱いていたのであり、出版が人々と社會に與える影響を深く理解していたと言えよう。

第四に、郭勛の文學活動の背景にあつた人脈についてである。郭勛は、白沙學派の重鎮である湛若水・張詡、嘉靖前期に世宗に重用された霍輜など、嶺南出身の一流士大夫と交誼があつた。彼らの詩文や奏疏には、郭勛の文武兼備の才や人柄が高く評價されている。また郭勛の幕下の文人が、家傳編纂や奏疏起草等の文筆活動を代行していたことも明らかにした。さらに、『水滸傳』成立への關與が疑われる李開先、家藏書目録『百川書志』で知られる錦衣衛武官の高儒についても、郭勛との交流を匂わせる史料が発見された(拙論參照)。

以上の研究から、郭勛の生平と文學活動の様相が鮮明になるとともに、善惡兩の顔を併せ持つ複雑な人間像が浮き彫りとなつた。

(三) 『三國志演義』『水滸傳』私刻を示す史料

郭勛が『三國志演義』『水滸傳』を私刻したことを示す根據として

まず言及される史料は、明代後期の著名な藏書家、晁璠(字君石、嘉靖二十年の進士)による家藏書目録『晁氏寶文堂書目』(嘉靖後期く萬曆初葉の成立か)である。その中卷「類書」部に、『水滸傳』武定板」『三國通俗演義』武定板」が著録される。書名下の注記は、撰者や卷數、刊刻時期、刊刻地など、抄本・版本の種類の記録であり、この「武定板」は、郭勛による家刻本を指すと見做されている。

『水滸傳』については、他にも郭勛が私刻したことを示す史料がある。例えば、中國國家圖書館藏『忠義水滸傳』一百卷(清康熙五年石渠閣重修本、索書號一〇七〇八)に附された天都外臣(汪道昆(字伯玉、嘉靖二十六年の進士)の號)「水滸傳序」に、「嘉靖時郭武定重刻其書、削去致語、獨存本傳」(嘉靖年間に武定侯郭勛がその書(『水滸傳』)を刻したが、致語(詩詞か)を削り、本傳のみを残した)と見える。この序の署名を含む末行は切り取られており(「天都外臣」の傍の一部が認められる程度)、序自體の眞偽には議論があるが、二〇一七年に日本傳存の石渠閣補刻本(現京都大學藏)が発見されたことを受けて小松謙氏が發表された近稿では、本物の可能性が高いと論じられている。また明末・錢希言『戲瑕』卷一「水滸傳」にも「今坊間刻本、是郭武定刪後書矣」(近頃の民間の書坊による刻本は、郭武定が刪節した後の書である)とある。

二 三國志物語の人物へのシンパシー

『三國志演義』私刻の意圖を考察するに際し、まずは郭勛が一人の讀者として三國志物語の人物を敬愛していたことを指摘する。

第一に、諸葛孔明への共鳴である。郭勛は正徳六く十二年に鎮守兩廣總兵官として廣西梧州に駐在し、當地の反亂を鎮壓するなどの勳功

を挙げた。この武略が孔明の南征を彷彿とさせたらしく、同時期に顔文芳（廣東南海の人、詳細不明）から贈られた無題詩には、「偉望已聞超葛亮、殊功應喜邁汾陽」（大きな名望は諸葛亮を超えるものとすでに聞こえており、優れた功勳は唐の名將郭子儀を超えるものとお喜びすべきである／『毓慶勳懿集』卷四詩56A）と、郭勛を孔明に擬えた讃辭が見える。

そもそも武定侯郭氏は南征と由縁の深い一門であった。始祖郭英は開國と雲南平定の功勳を以て武定侯に封ぜられたのであったし、その孫の郭登も緬甸に南征した際、『三國志演義』の孔明の描寫の如く、緬甸人を慰撫しながら心服させたという（明・商輅「追封定襄侯諡忠武郭公墓誌銘」）。また陳鑑（正統十三年の進士）「孝節詩」には「有子如諸葛」（郭登の父郭鉉には）諸葛の如き子がある／『毓慶勳懿集』卷四詩21B）という表現も見える（拙論参照¹³）。郭勛も、これらの祖先を偲びつつ、自身の文武兼備の才と南征の經歷を孔明に重ねたことだろう。

第二に、郭勛は關羽を尊崇していた。この事は『奏進郭勛案狀』「刑部等衙門謹題」に、「勛要得假借神像扇惑人心、不合圖畫觀音・關師等像十餘萬軸、於本年五月初五等日、招集京城内外軍民男婦人等到家頒給」（郭勛は神像を使つて人心を惑わさんとし、不法にも觀音・關師の肖像十數萬軸を描き、本年「嘉靖十九年」五月五日、都内外の民の男兒や夫人らを家に集めて配つた／26A）と見える。

郭勛の孔明・關羽に對する親近感や敬愛は、おそらく武臣としての實戰に基づいており、知識人が抱くような「歴史的な」評價とはまた異なるものであつたらう。そのような共鳴感が、郭勛を小説『三國志演義』の刊刻に驅り立てる要因の一つになったのかもしれない。

三 『三國志演義』の刊行意圖

一 「大禮の議」を視野に

本節で考察の出発点とするのは、關中（關西）修髯子による「三國志通俗演義引」（以下修髯子序と稱す）である。この序は現存する『三國志演義』諸版本のうち、所謂「嘉靖壬午序本」（上海圖書館等藏）・「周日校本」（國立國會圖書館等藏）・「夏振宇本」（名古屋蓬左文庫藏）に附されており、嘉靖壬午序本は序末に「嘉靖壬午（元年、一五二二）孟夏（四月）吉望（十五日）關中修髯子書于居易草亭」の署名、「尙／德」・「小書庄」・「關西張子／詞翰之記」の印章を持つ（周日校本・夏振宇本は「壬午」を「壬子」と作るが、筆者は、兩者の刊行者が郭勛の獄への連座を避けて、故意に署名年を偽つたのではないかと考える。また兩者には印章が無い）。關中（關西）修髯子が何者であるかは長らく謎とされてきたが、筆者は拙著『三國志演義成立史の研究』序章において、以下の四點を根據として、郭勛の號の一つではないかと推定した。

- (i) 嘉靖壬午は、郭勛が家刻本を精力的に刊行した時期に近い。
- (ii) 郭勛家刻本『詩韻釋義』（平水韻によつて漢字を分類し各字に字義を注した韻書・字書。中國國家圖書館藏本（索書號〇二五〇七））の題署には、「江東雪崖老人集／關西修髯子釋義」とある。しかし、卷首の楊一渙序には、「得之江東雪崖」（郭勛が）江東の雪崖からこれを得た」とはあるが、「釋義」を施したという「關西修髯子」への言及が無い。郭勛が自身の密やかな號を題署に附し、成書に參與したかのような體を装つたのではないか。
- (iii) 序文は『三國志通俗演義』を所藏する藏書堂の主人修髯子と客人の間答形式で、末尾の印章「小書庄」がその藏書堂の名と

考えられる。武定侯家の藏書堂の名も同じく「書莊」（莊と庄は通字）であったことが、高儒『百川書志』¹⁵卷五「史、目錄」の「書莊記」一卷、國朝武定侯家刻書目也」から示唆される。

(iv) 序が書かれた「居易草亭」は、白居易を意識した亭號であろう。郭勛も『白樂天詩集』・『白樂天文集』を私刻したことに表れているように、白居易の詩文を愛好していた。それに因んで自宅の亭を「居易草亭」と號していたのではないかと考えられる。

以上はいずれも傍證ではあるが、本論では一先ず修髯子序が郭勛によって書かれたものと見做し、分析を進めることにする。

修髯子は、『三國志通俗演義』の價值について「不幾近於贅乎」（無駄に近いのではないか）と言う客に對し、以下の如く反駁する。

史氏所志、事詳而文古、義微而旨深。非通儒夙學、展卷間、鮮不便思困睡。故好事者、以俗近語、櫟栝成編、欲天下之人、入耳而通其事、因事而悟其義、因義而興乎感。不待研精覃思、知正統必當扶、竊位必當誅、忠孝節義必當師、姦貪諛佞必當去。是是非非、了然於心目之下、裨益風教、廣且大焉。

（史家の記述は、事情が繁多で文章は古風、道理が精深で意義は深奥である。古今に通曉した博學な儒者でなければ、卷を開く時、やや不便で眠くなる。故に好事者が、通俗的な言葉を用い、潤色して編集し、國中の人が、聞いて樂しみつつ事情を理解し、事情からその道理を悟り、道理から感動を起こせるようにしたのだ。研究・深思せずとも、正統は必ず扶くべき、位を盜めば必ず誅せられるべき、忠義孝節は必ず見做うべき、奸貪諛佞は必ずとり除くべきと分かる。善と惡は、心の目の下に瞭然とし、人民の教化に役立つこと、多大である。）

つまり、『三國志演義』は、劉備・劉禪の蜀漢をも含む漢王室が「正

統」であり、その漢王室を輔佐して崇ぶことこそ「忠孝」であると、讀者に自然に悟らせることを促すものと評價しているのである。この態度は一見、南宋の朱熹が宣揚した蜀漢正統論の敷衍に過ぎぬようにも見える。しかし、異民族に中原を奪われたが故に漢族の正統性に敏感であった南宋期ならばともかく、明の嘉靖初期において、かかる主張を持ち出した背景には何があったのか。筆者は、この書の刊行が世宗嘉靖帝の即位（正徳十六年四月二十二日）からほぼ一年後であることを考慮した上で、當時の朝廷の一大論争であった「大禮の議」における皇統の正統性の問題が関わっているのではないかと考える。

大禮の議とは、正徳十六年（一二二二）、武宗正徳帝が後嗣の無いまま崩御したため、その母張太后と大學士楊廷和らが、外藩の安陸州（現湖北省鍾祥市）興王府から、武宗の從弟にあたる朱厚燧（即ち世宗嘉靖帝）を迎え入れて即位させた所、天子の父母への尊號をめぐって對立が生じ、政治鬭争へと發展した事件である。

以下に大禮の議における對立を整理しておく。¹⁶ 大學士楊廷和ら舊閣臣で構成された所謂「反議禮派」は、嫡子繼承による皇統（父から子への皇位繼承）を「正統」と尊び、世宗に對し、伯父にあたる孝宗弘治帝を「皇考」（ふつう皇帝の生父の號、張太后を聖母（生母）と號するよう求め、孝宗と世宗の間に父子關係を擬制し、形だけでも皇統の嫡子繼承を保とうとした。その際に根據としたのは、西周以來の傳統的宗法の規範「爲人後者爲之子也」（人の後と爲る者は之が子と爲るなり／『春秋公羊傳』成公十五年の傳）である。

一方、世宗の立場からすれば、形式上といえども伯父・伯母を父母と號することは、實の父母の後嗣斷絶という大不孝を意味する。しかし十五歳の若さで外藩より皇宮へ入った世宗は孤立無勢で、老練の舊

閣臣に對抗するだけの根拠も提示できずにいた。

最初に世宗擁護の疏を奏したのは、世宗即位當年（正徳十六年）の進士張璉（のち字敬に改名、字乗用、永嘉（現浙江省温州市）の人）である。續く桂萼・霍韜・席書・方獻夫らで構成された「議禮派」は、統（皇位繼承）と嗣（家族長の繼承）は別物で、嗣の規範である「爲人後者爲之子也」を統に敷衍する必要は無く、血縁の生父母を尊重することこそが大孝であるとした。かくて援護を得た世宗は、反議禮派の官僚を次々と罷免し、嘉靖三年、生父である故興獻帝朱祐杭を皇考、生母蔣太后を聖母と號し、大禮の議を決着させた。

ちなみに郭勛が議禮派に屬したことは、『明史』卷一三〇「郭英傳」（郭勛傳）に「大禮議起、助知上意、首右張璉、世宗大愛幸之」、同書卷一九六「桂萼傳」に、嘉靖三年の左順門事件（楊慎ら反議禮派の廷臣が張璉・桂萼を打ち殺そうと圖った事件）で「萼・璉……走武定侯郭勛家以免。勛遂與深相結」とある通りである。

さて、議禮派の張璉は、世宗が生父母を皇考・聖母と號しても皇統の正統性に問題無いことを裏付ける根拠として、前漢の第五代文帝（第二代惠帝の異母弟、第三・四代少帝の叔父）と、第九代宣帝（第八代昭帝の兄の孫）を例に挙げ、皇位繼承が父から子へ渡っておらず、父子擬制もなされていない例が歴史上にあると理を説いた（『明史』卷一九六「張璉傳」）。ここで『三國志演義』の舞臺である後漢末の皇位繼承に目を向けてみると、やはり嫡子繼承の規範から大きく逸脱したものであることに氣づく。とりわけ第十代質帝から皇位を繼いだ第十一代桓帝は、質帝の父親世代にあたる族叔である。子世代から父世代へと遡ったわけであり、もはや父子關係を擬制するには無理がある。しかし『三國志演義』は、皇統に嫡子繼承の斷絶が起こつていようと、漢

王室が扶くべき「正統」であることに變わりはなく、「竊位」（帝位を盜む）者、即ち帝を傀儡にして擅に暴虐の限りを盡くす董卓、帝を僭稱する袁術、第十四代獻帝に禪讓を迫る曹氏一族が「惡」であることを読者に訴える。甚だしきは、中山靖王の子孫として漢王室との血縁關係を自稱する、劉備までもが「正統」に思えるように書かれている。つまり、世宗を擁護するために、嫡子繼承（父から子へ）という規範に則しておらずとも皇統は「正統」たり得ると主張するには、『三國志演義』はもつてこいの作品であるといえる。

また、皇位繼承時の波亂は、皇帝の權力や權威の弱體化、ひいては國家の衰退を引き起こし兼ねないものであるが、『三國志演義』は、それに對する警鐘の作用も有し得る。以下に、後漢末の朝廷と嘉靖初の朝廷における皇權の消長に焦點を當て、分析を加える。

後漢第八代順帝の御代、外戚の梁冀が權力を持った。順帝が崩御すると、梁冀はわずか二歳の冲帝を擁立し、冲帝崩御後にはその族弟にあたる八歳の質帝という幼帝を擁立した。さらには質帝を毒殺し、質帝の族叔にあたる桓帝を強引に即位させるといふ暴舉に出る。のち梁冀は桓帝によつて肅正されたが、ついで宦官が強い權力を持つ。ここからは『三國志演義』の開端に以下の如く語られる通りである。

後漢桓帝崩、靈帝即位、時年十二歲。朝廷有大將軍竇武・太傅陳蕃・司徒胡廣、共相輔佐。至秋九月、中涓曹節・王甫弄權。竇武・陳蕃預謀誅之、機謀不密、反被曹節・王甫所害。中涓自此得權。（嘉靖壬午序本第一則冒頭）

續く靈帝（桓帝の族姪）の代には、黨錮の禁を経て宦官の專横が更に惡化し、黄巾の亂が起こる。そして治亂の朝廷で董卓に擁されつつ即位した八歳の獻帝にはもはや實權は無く、傀儡として覇權争いの道具

とされた。終には曹氏に禪讓を餘儀なくされ、後漢は亡びるのである。以上のような後漢衰退の経緯について、政治史研究の方面では、岡崎文夫・川勝義雄以來、權力を私物化する外戚・宦官（所謂濁流）と、權力の私物化に抵抗する官僚・黨人ら（清流）の對立という構圖でとらえられて來たが、近年、渡邊將智氏が指摘されたように、皇統の斷絶問題による皇權弱體化の影響も看過することはできない。

一方の嘉靖初の朝廷はと言うと、世宗は傍系、且つ登極時には十五歳の若さであつた。内廷では、張太后が不遜な態度で世宗母子を牽制し、その弟張鶴齡・張延齡兄弟が外戚の威で以て民を害す有様であつた（『明史』卷一四「后妃二」〔孝宗孝康張皇后〕）。また豹房政治と揶揄される武宗の弊政で偏用された内官の多くは世宗即位の詔書で罷免となつたとはいえ、宦官の權力欲と金錢欲は盡きることがない。外廷では正徳以來の舊臣が世宗の人孤勢單を機と見て、今こそ自身の政治を展開せんと、虎視眈々と野心に燃えていたことだろう。世宗の皇權は、反議禮派を容易には抑制し得なかつたことから分かるように、非常に弱々しいものであつた。もしもここで實權を握れず、皇權が猶も弱體化し、皇帝に對する敬いが失われるようなことになれば、世はさらに混亂し、後漢末のような亂世へと突入しかねない。

このような状況下で、郭勛のような勳戚が、皇權弱體化の末に國家が滅亡する様を描く『三國志演義』を刊刻すれば、廷臣への警鐘となることは勿論、即位後間もない世宗に、朝廷における自身の境遇を確と認識させることにもなる。世宗は嘉靖前期にわたる數々の禮制改革によつて皇權の強化を圖つたことで知られるが、或いは郭勛刻の『三國志演義』が、世宗をして大禮の議での強硬な態度、その後の禮制改革へと歩ませることに一役買つたのではあるまいか。

以上、嘉靖壬午（元年）の『三國志演義』刊刻の背景に、世宗及び議禮派を擁護する意圖があつた可能性を考察してきた。本論では修髯子が郭勛であるという假定で論じたが、兩者が別の人物であつたとしても、以上の考察は『三國志演義』を讀解する上で、また明代當時の受容のあり方を解き明かす上で、一つの手掛かりとなろう。

四 『水滸傳』に假託された

武官輕視の社會への批判的精神

以下、『水滸傳』私刻の意圖の考察に移る。第一節で觸れた戴不凡の論考は、郭勛が『水滸傳』本文の編纂・改變に參與した可能性の推測に歸結するものではあるが、郭勛の生平や嘉靖期の社會情勢と、『水滸傳』に描かれる起義や民族問題といった政治的問題の共通點を考察する點は刮目すべきである。また、大塚秀高氏は論考の一部で、郭勛が妖人李福達を匿つたことで失脚しかけた事件に着目し、郭勛はアウトローとつきあう自身の立場を正當化し、且つ自らを攻撃した言官に反撃を加えんがために、『水滸傳』の綠林の好漢が抱く皇帝への忠義心が強調されるよう、改變を施したのではないかと推察する。兩論考は、『水滸傳』の作品性と、郭勛の生平及び當時の世相を引き合わせる點で意義深いが、現段階では郭勛が本文の編纂・改變に關わつたかどうかまでは考證不可能であるから、本論では、刊刻の意圖に問題を絞り、改めて論ずることにしたい。

ちなみに、現存する『水滸傳』版本には郭勛刻本と斷定し得るものは無いため、本論では便宜上、現存最古の版本とされる所謂「容與堂本」（中國國家圖書館藏『李卓吾先生批評忠義水滸傳』一百卷引首一卷〔索書號一七三三八〕）を底本として用いる（日本國立公文書館藏容與堂本は萬曆

三十八年（二六一〇）の李贄序を持つ。

『水滸傳』には様々な身分の好漢が登場する。彼らが有する価値観について、小松謙氏は、「知識人・文官に對する反發が顯著に認められ」、「中國知識人社會に通用している価値観とは、全くその性質を異にして」おり、藝人や牢番・警官・肉屋といった被差別民、社會的に白眼視される人々の価値観、または武人の価値観が表れていると指摘する。とりわけ武人の価値観が反映された例として、第三十三回の花榮が劉高を評するせりふ「這厮又是文官、又沒本事」、第三十四回の慕容知府の元に戻ろうとする秦明を引き留める燕順のせりふ「不强似受那大頭巾的氣」（あの大きい頭巾の奴ら〔文官のこと〕に腹立たしい目に遭わされるよりはましと申すもの）などを挙げる。小松氏が用いる「武人」という語は、官・民を問わず武を嗜む者を指す語であるが、上掲の例については、名門たる武家出身の花榮、或いは高級武將たる秦明の、文官に對する「武官」の価値観の表出と見做すのがより適當に思われる。そこで本節では「武官」の価値観という視点から、『水滸傳』の作品性の再考を試みたい。

『水滸傳』は北宋末を時代背景とするが、明代の讀者は同時代の世相を連想しながら讀んだであろうから、ここで明代の武官制度について確認しておく。原則的には、まずは武勳を以て武官に封ぜられ、嫡長子がその官職を世襲する。彼らは國から俸祿を受ける一種の貴族的身分であったが、兵士の指揮・訓練を擔い、戦があれば出征の責務を負った。しかし明代後期になると、宦官や文官及びその族人への恩蔭として武官が賜豫され、或いは賄賂で武官を贖う者も續出し、大きな戦が減少したことも相俟つて、武官が享受する蕩盡たる俸祿による國庫壓迫が問題となり、文官からの非難の對象となった。

郭勛ら公侯家も、公侯の爵位を繼ぐ長子以外は多く錦衣衛等の武官を授かったので、このコミュニティに屬する。そんな郭勛の言動には、文官に對する武官という立場からの反發がしばしば見られる。

例えば郭勛は、嘉靖五年三月の進士登第者を祝う賜宴で禮部と、同年四月の武舉登第者の賜宴で兵部と、席次の序列をめぐる争つた。これを御史張景華らに彈劾されると、自劾して辭職を願ひ出て、「即今太平盛世、固當任文臣所爲」（今は太平の世ですから、もとより文臣のやる事に任せるべきなのです）と腐つた様子で世宗に訴えた。世宗は「卿世有助勞、朝廷任以兵政」（そなたには代々の勳功があり、朝廷は軍政を任せているではないか）と慰め、辭職を認めなかつた（『世宗實錄』卷六四〔嘉靖五年五月〕丙申）。

また、嘉靖十九年四月、郭勛は收賄の罪で禁錮となつた涼州副總兵の時陳を擁護して、以下のように文臣の弊害を糺彈している。

翊國公郭勛上言、「將臣雖以善戰爲勇、亦以相機爲智。而文臣不諳軍旅、但驅之使戰、或待以苛禮、或繩以文法、至於誣死。」（『世宗實錄』卷三三六〔嘉靖十九年四月〕癸未）

（翊國公郭勛が上言した、「將臣〔武臣〕は戦いに優れることを勇としますが、臨機應變であることも智とします。しかし文臣は軍事に暗く、ただこれ〔武臣〕を驅り立て戦わせるばかりで、煩瑣な禮式を以て待遇したり、〔情況を顧みず〕成文法を以て糺彈し、誣告して死に追いやることまであります。）」

このように武官の立場に立脚した憤りを抱いていた郭勛は、『水滸傳』に描かれた、忠義を存するにも關わらず文官に虐げられる武官の現實に共感し、それを世に知らしめるために私刻に至つたのではないかと考えられる。

また『水滸傳』に登場する武官にも、鴛鴦樓で武松に殺される張都監・張團練のように、好漢に誅される悪者がいる。これは、社會的に同じ武官というコミュニティに屬していようと、不義であれば罰するという、自身ら好漢たる武官の公正さを標榜することに繋がる。

五 水滸的好漢の模倣、

或いは自身の投影としての好漢

『水滸傳』の前半では、好漢達がやむを得ぬ事情により罪を犯して落草に追い込まれる經緯が細やかに述べられる。序盤で言えば、九紋龍史進が山賊の情に心打たれて交誼を結び、事が露見して村を落ち延びることとなった經緯、花和尚魯智深（魯達）が金翠蓮父娘を救わんとして阿漕な肉屋鎮關西を殴り殺してしまい、落草して剃髮する經緯、八十萬禁軍教頭の豹子頭林冲が悪代官高俅の息子に陥れられ配流されて落草に至る經緯、といった具合である。彼らはみな「忠義」（ここでは仲間に対する誠意）を存する者として肯定的に描かれ、不法行為も「替天行道」と賞賛される。また、晁蓋・宋江・柴進のように、好漢らを匿い庇護する存在が描かれ、彼らを中心として集結した梁山泊は、後半で政府の招安を受け、「忠義」（ここでは國家に對する忠誠）を盡くして遼征伐・方臘征伐に赴く。

このような『水滸傳』物語の構造と忠義の精神は、郭助の現實の情況に重なる所が多い。

第一に、郭助は、犯罪者に關わらず自身のコミュニティに屬すると見做した人間であれば、法を犯してでも守ろうとした（その道德的評價は一先ず措く）。例えば、『奏進郭助案狀』『刑部等衙門謹題』（2B-3A）に記載された事件である。嘉靖七年七月に官銀を横領して邊境の

衛所に流刑となつた知州（散州の長官）金輅（『世宗實錄』卷九八戊寅に據れば「錦衣人也」）を、郭助は奪還して都へ歸し、ついにはその責を負つて、一時兵職と大保太傅を解任された。

嘉靖七年七月内、有先年犯罪知州金輅侵盜官銀逃回。事發、刑部題、奉欽依、「發隆慶衛永遠充軍着伍訖」。助不合擅將金輅取回私置門下、及又將該衛不在官指揮王臣擅拿私宅拷打、逼取銀兩。……（中略）……奉欽依、「郭助……（中略）……及事露著、自陳強辯飾非、不肯諷服。明是欺罔朝廷、全無人臣之禮。論法本當重治、念係勳

戚世臣、姑從寬、革去管事并保傅職銜、著在中府帶俸閒住。」この事件は、『水滸傳』における、滄州への護送途中の林冲を魯智深が助ける場面（第八・九回）、江州への護送途中の宋江を赤髮鬼劉唐が助ける場面（第三十六回）、そして物語の見せ場の一つである、死刑寸前の宋江を梁山泊好漢らが法場に乗り込んで救い出す場面（第四十回）を想起させる。

『世宗實錄』卷一〇〇（嘉靖八年四月）丁亥の記載に據れば、この事件を審議した刑部尚書高友璣は、「郭助が金輅を救つたのはその父親（醫者）と舊知であつたため」、「通政使柴義から依頼を受けたため」、「收賄した」、「騙されただけ」などと矛盾する報告を次々に上げたために、郭助を庇つているとして彈劾された。故に郭助が金輅を救つた眞の理由は闇の中ではあるのだが、「無理を通して粉飾して陳述し、天子の諭に従おうとせず」（傍線部）とあるように、郭助が世宗の怒りを買つても罪を認めなかつた背景には、『水滸傳』に描かれた忠義（仲間への誠意）に基づく好漢同士の絆のようなものがあつたのではないかと思われる。

第二に、郭助は、社會的身分を失つて行き場を亡くした人々、即ち

「無籍棍徒」「無賴惡棍」を自宅に不法に匿っていた點で、『水滸傳』に登場する頭領格の人物らを彷彿とさせる。郭助が無賴漢を匿っていた實情は『奏進郭助案狀』に詳しく、「江西道監察御史董漢臣謹題」に「濫收無籍棍徒」(15A)、「助爲臣子、門客家人數有千餘、蜂蟻成群、虎彪爲族」(18B)、「刑部等衙門謹題」に「不合招集四方亡命并無賴惡棍」(3B)などとある。逃亡犯の元生員楊紹元・裴應龍といった知識分子から、寫字軍人(詳細不明だが、萬曆「廣東通史」卷九「藩省志九、兵防總下、上班」に「總兵府寫字軍人」の語が見え、衛に屬した軍人とみられる)高遷、逆囚張延齡の家人であつた李彥實・吳質・張洪・周德、正徳期の佞宦劉瑾の黨人であつた張綵・張維などがおり、「俱各投助門下、結爲心腹、分布牙爪、生事害人」(みな各々郭助の門下に身を投じ、腹心となり、手先となつて、事件を起こして人を害した/5B)という。その噂は廣く聞こえていたらしく、「有在官四川民人史忠要得投充將軍、不合越關來京投助、亦不合容留潛住」(23B)とあるように、自ら郭助の名を慕つて身を投じにやつて來る者もあつた。

このような郭助の行動は、『水滸傳』の登場人物、即ち赤髮鬼劉唐を匿うなど、「專愛結識天下好漢」(天下の好漢と知り合うことを専ら好む/第十四回)東溪村の保正托塔天王晁蓋、山東鄆城縣の押司でありながら江湖の好漢に「及時雨」と慕われ梁山泊の頭領となつた呼保義宋江、護送中の林冲がその名を慕つて訪なうなど、「門招天下客」(門下に天下の遊客を招く/第九回題)滄州の小旋風柴進に相通ずる。とりわけ小旋風柴進の人物設定には、郭助との共通點が多く認められる。以下に引用するのは、『水滸傳』第九回で宿の主人が林冲到柴進の人となりを紹介する部分である。

店主人道、「你不知俺這村中有個大財主、姓柴、名進、此間稱

武定侯郭助による『三國志演義』『水滸傳』私刻の意圖

爲柴大官人、江湖上都喚做小旋風、他是大周柴世宗嫡派子孫。自陳橋讓位、有徳太祖武徳皇帝勅賜與他誓書鐵券在家中、誰敢欺負他、專一招接天下往來的好漢、三五十個養在家中。……」

つまり柴進は、(i)滄州(現河北省滄州市)の富家で、(ii)五代後周の世宗柴榮の末裔で、(iii)北宋太祖趙匡胤より賜つた鐵券(子々孫々の厚遇や死罪免除等の特權を保證する文書)を有し(九六〇年、後周の殿前都點檢だつた趙匡胤が起こした謀反「陳橋の變」により柴氏が讓位したため)、(iv)天下の好漢三、五十人を養つている。一方の郭助は、(i)順天府(北京)に居して巨萬の富を築き、(ii)開國の功臣郭英の末裔で、(iii)明太祖朱元璋から賜つた鐵券を有し(『太祖實錄』卷一六一壬午)、(iv)天下の好漢を數千人餘り匿つていた。細部は異なるものの、郭助が『水滸傳』を讀めば柴進に自身を重ねたであろうし、一部の讀者も柴進から郭助を連想し得たであろう。

郭助が無賴漢を招集して不法行爲を行つた動機には、一種の義俠心もあつたであろうが、もう一つには、彼なりの國家に對する忠義があつたものと思われる。『明實錄』の郭助に關する條を全て見ればわかるが、郭助は絶えず政務と軍務、祭祀代行などの業務に忙殺されていた上、嘉靖前期の世宗による大規模な禮制改革において、次々と筆頭重役に任じられた。例えば、嘉靖九年には四郊(祀天の祭壇)建設の總督工程官、『祀儀成典』(祭祀儀制の改訂版)編纂の監修官、嘉靖十三(十五年)には明朝歴代の『實訓』『實錄』重録の監録官、神御閣・延祿宮(『實訓』『實錄』の安置所)建設の督工、嘉靖十四(十五年)には太廟改建の總督工程、嘉靖十七年には世宗の生母蔣太后的陵墓建造の筆頭總督に任じられている。これらの業務を滞りなく指揮して進めるためには、郭助の手足となつて自由に動かせる人員が相當數必要であつ

たろう。『奏進郭勛案狀』に見える無頼漢の罪狀が、多くは恐喝・詐欺であることも、國家事業の材料費や人件費が國からの支給では足らず、資金繰りする必要があつたためではないかとも疑われる。

しかし如何なる事情があろうと、何千もの無頼漢を招集して不法行為を行つていれば、當然周囲からの弾劾を招くことになる。下手をすれば、輩を糺合して謀反を企んでいるとも見做されかねない。そこで郭勛は、忠義（國家への忠誠）の名の下に「替天行道」と稱して犯罪さえも辭さぬ『水滸傳』の好漢達に、自身らを假託することで、その不法行為の正當化を圖つたのではないかと考えられる。

こうした郭勛の國家に對する忠義は、世宗にもある程度認められていた節がある。『世宗實錄』卷九七（嘉靖八年正月）丁未の記載に據れば、大學士楊一清が「近頃團營の兵政が武定侯郭勛によつて阻まれてゐる」として世宗に戒めを請うた時、世宗は「但勛之心亦素存忠。

：（中略）：不肯省圖改之、所謂慾勝理、不過一常才耳、如肯改過、則爲一超群之才、而無及者」（しかし郭勛の心は素より忠を存している。

：（中略）：反省してこれを改めようとしなければ、欲が理に勝つてゐるというもので、凡才に過ぎないが、もし過ちを改めようとするならば、群を抜きんでた才となり、匹敵する者は無い」と答えた。つまり郭勛の心の本質は「忠」であると言つて擁護したのである。そして不軌という大罪の嫌疑が告發されるまで、世宗は終に郭勛の處遇に本腰を据えることはなかつた。

六 『水滸傳』と正一教の稱揚

最後に、『水滸傳』に登場する道教の一派「正一教」と郭勛との密接な關係について指摘する。

『水滸傳』の開端は、北宋仁宗の御代、天下に疫病が生じ、救命を受けた洪太尉（洪信）が、江西龍虎山上清宮の張天師を訪ねる一幕から始まる。洪太尉は好奇心と傲慢さから、「伏魔之殿」に封印されていた三十六の天罡星と七十二の地煞星を解放してしまい、それが天下に散らばつて百八人の好漢に生まれ変わるのである。

龍虎山の上清宮は、道教の一派正一教の總本山たる道觀として、現在も江西省貴溪縣（明代は廣信府に屬す）に鎮座している。正一教とは、後漢の張道陵に始まり、孫の張魯が漢中で五斗米道と稱して布教し（『三國志演義』にも登場）、その子張盛が東晉期に據點を江西龍虎山へと移し、全國へと勢力を廣げた宗派である（詳しくは莊宏誼氏の專著を参照されたい）。領袖の稱である「天師」は子々孫々に承継がれ、現在も第六十四代天師の張道禎氏が臺灣に在住しておられると聞く。

明代においては、朱元璋が張天師を眞人と號し（『太祖實錄』卷三四甲戌）、官位は正二品（『明會典』卷十二）、正統以降その世襲が認められた（『英宗實錄』卷一二八戊辰）。世宗も、嘉靖五年に第四十八代天師張彥頤、嘉靖二十八年に第四十九代張永緒を各々眞人に封じ、天下の道教を掌るよう命ずるなど、正一教を厚く保護している。また嘉靖前期には上清宮の道士邵元節を篤信し、邵元節の死後には後釜の陶仲文に心酔し、嘉靖二十一年十月丁酉の「壬寅の宮變」（宮婢による世宗殺未遂事件。ちなみに郭勛獄死の十二日後）以降は西苑に居を移し、道教に一層傾倒したことが知られる。

邵元節は、江西貴溪の人、龍虎山上清宮の道士で、正徳年間に謀反を企てた江西南昌の寧王朱宸濠に招かれたが、辭して赴かなかつたという。嘉靖三年、天師張彥頤の推薦により都へ召され、長雨長雪の祈禱での應驗を以て致一眞人に封ぜられる。さらに未だ嗣子の無い世宗

のために祈嗣の齋醮を行い、第一皇子が誕生、その後も七子まで出生が続いたことで、世宗の篤信を得るに至った。嘉靖十八年、病のため世宗の承天府（安陸）僥倖に同行できず、そのまま病死し、伯爵の禮を以て葬られた（『明史』卷三〇七「佞倖傳」〔邵元節〕）。臨終の邵元節が自身の後釜として薦めた陶仲文（初名典信）は、縣吏などの職の旁らに道術を學んでいたが、早くから邵元節と誼みがあり、嘉靖中にはその邸に寓居していたという人物である（『明史』卷三〇七「佞倖傳」〔陶仲文〕）。

そして郭勛も、幕下に段朝用なる道士を抱えており、嘉靖十九年、段朝用が鍊成した銀（實は郭勛から盗んだ銀）の器を不死の道具と稱して世宗に献上して歡心を得るといふ事件があつたが、『明史』卷三〇七「佞倖列傳」（段朝用）に據れば、献上の際に口添えをしたのは、邵元節の弟子陶仲文であつた。この他、嘉靖十年十一月、邵元節が主持したとみられる七晝夜に及ぶ祈嗣の金籙大醮の際、郭勛も進香に参加しており（『世宗實錄』卷一三三「癸酉」、兩者の接點が見出せる。また郭勛が家刻した『詩韻釋義』（「三」前出）の「集」者「江東雪崖」は邵元節の號であつた可能性が、清・婁近垣撰『龍虎山志』卷六「世家」張魯傳の「大江之東、雲錦山、亦名龍虎山」といふ記載（即ち龍虎山を江東と稱し得るといふこと）、卷七「人物」邵元節傳の「號雪崖」といふ記載から示唆される。これらのことから、郭勛は世宗が庇護する正一教の道士と共同體を成し、そのアピールを目的の一つとして、龍虎山上清宮を物語の發端とする『水滸傳』を私刻したのではないかと考えられる。

ちなみに、龍虎山上清宮的一幕は、郭勛にとつてもう一つの重大な意義を有したと思われる。伏魔殿に封じ込められた「魔王」は、真人

の言葉に「走了魔君、非常利害」（第一回）、「若還放他出世、必惱下方生靈」（第二回）とあるように、封印を解かれて世に出れば民衆に害を及ぼす存在であるらしい。これが好漢百八人に生まれ變つたとなると、『水滸傳』は民を虐げる惡の側に立つた作品ということになりそうだが、實際には好漢達は寧ろ、強きを挫き弱きを助ける民衆の庇護者として描かれている。この魔王は、日本の御靈信仰のように、利益と損害をもたらし得る二面性を持つものなのではないか。御靈信仰では、本來は天災や疫病をもたらし人々を脅かす存在を祀つて鎮めることで、その強大な力による加護が得られるとされる。同様の信仰は中國においても、非業の最期を遂げた英雄關羽を祀ることで逆に加護が得られると信じられて來たこと、豐饒と健康を願う地方劇儺戲において英雄鎮魂劇が演じられていることなどに認められる。魔王の生まれ變わりたる好漢達は、自然、善と惡の両面性を持ち、彼らを阻む者は損なわれて當然で、彼らを英雄とみなして頼る民は庇護されるべきという論理が成り立つ。この論理は、善惡兩の顔を持つ郭勛の言動を正當化することに繋がる。

結語

本稿では、武定侯郭勛が『三國志演義』『水滸傳』を私刻した意圖を、郭勛の生平と嘉靖前期の時局に引き合わせながら探つてきた。

『三國志演義』私刻の背景には、（一）諸葛孔明・關羽に對する親近感と敬愛、（二）大禮の議において世宗嘉靖帝を擁護する意圖がうかがわれた。『水滸傳』私刻の背景には、（一）武官が輕視される社會への批判、（二）郭勛とその幕下の無頼漢らの行爲が忠義（仲間同士及び國家に對する）に基づくものであることのアピール、（三）世宗が厚遇

した正一教の稱揚などの意圖がうかがわれた。

郭勛のように、勳戚でありながら文學活動に造詣があり、しかも皇宮内部の政治情況から、社會的下層階級の現實——社會の暗黒面と言ふべきかもしれない——までを熟知する稀有な人間が、兩小説に假託した信念や社會への警鐘と憤りは、かなりの現實性と説得力をもつて、多方面の人々に影響を及ぼし得たものと思われる。士大夫の中にもその作品性に同調を覺えたり、價值を見出す者が現れてもおかしくない（或いは皇帝にも影響を與え得たろう）。そして、同時期に、文壇を牽引した李夢陽が「眞詩乃在民間」（眞の詩は乃ち民間に在り）李夢陽撰『弘德集』自序と唱えたり、王陽明とその弟子らの講學によつて社會に啓蒙的な氣運が高まつていたことも相俟つて、知識人らの通俗文藝に對する態度を變え、さらには讀書という行爲の大衆化を引き起こすことに繋がつたのではあるまいか。

兩小説が現代まで讀み繼がれる兩作品たりえたのは、作品に本來的に内在する精神が、英雄・正義・道徳を求める萬人の心に普遍的に響くものであつたからには違ひあるまいが、郭勛による私刻がその歴史の一轉機を擔つたことも、尙然るべく認識されるべきであろう。

注

- (1) 『明史』は中華書局排印本（一九七四年）に依據する。
- (2) 中國國家圖書館藏『水滸傳』殘卷（所謂「嘉靖本」）を郭武定本と疑う議論など。白木直也・佐藤春彦・馬幼垣らに論考がある。
- (3) 戴不凡『小説見聞録』（浙江人民出版社、一九八〇年）九〇～一三五頁。
- (4) 『中華文史論叢』二〇一五年第一期（總第一一七期）、三六七～三八九

頁、二〇一五年三月。

- (5) 『明實錄』（中央出版社、中央研究院歷史語言研究所民國五十年刊本縮編、一九六二年）。
- (6) 拙論「明朝勳戚武定侯郭氏と文學——家譜・年譜——」（『京都府立大學學術報告・人文』第六八號、九三～一五二頁、二〇一六年十二月）。
- (7) 拙論「明朝勳戚武定侯郭氏と文學——諸葛の如き——定襄伯郭登——」（『中國文學論集』第四六號、一一一～一三三頁、九州大學中國文學會、二〇一七年十二月）。
- (8) 拙著『三國志演義成立史の研究』（汲古書院、二〇一六年）序章の本文及び注二三。當時は『郭氏文獻集』を把握できておらず、後に注(9)後掲の拙論（前編）にて言及した。
- (9) 拙論「武定侯郭勛の人脈——その文學活動を支えたもの（前編）」（『中國文學論集』第四七號、三七～六九頁、九州大學中國文學會、二〇一八年十二月）、同「武定侯郭勛の人脈——その文學活動を支えたもの（後編）」（『和漢語文研究』第一六號、二〇一～二二四頁、京都府立大學中國文學會、二〇一八年十一月）。
- (10) 馮惠民・李萬建等選編『明代書目題跋叢刊』（書目文獻出版社、一九九四年）北平圖書館館本影印。
- (11) 馬蹄疾編『水滸資料彙編』（中華書局、一九八〇年）。
- (12) 小松謙『水滸傳』石渠閣補刻本本文の研究」（『中國文學報』第九一冊、京都大學文學部中國文學會、二〇一八年十月）。
- (13) 注(7)前掲の拙論一一七頁。
- (14) 嘉靖壬午序本は『古本小説集成』（上海古籍出版社、一九九〇～九四年）に依據する。
- (15) 『百川書志・古今書刻』（古典文學出版社、一九五七年）。
- (16) 大禮の議については『明史』の他、趙中男主編『明代宮廷政治史』（故

- 宮出版社、二〇一五年) 第八章(胡凡・陳鵬著)等を参照。
- (17) 渡邊將智「范曄『後漢書』の人物評價と後漢中後期の政治過程」(『古代文化』第九卷第一號、四一〜六〇頁、二〇一七年六月)。
- (18) 注(3)前掲の戴不凡論考、(五)・(六)。
- (19) 大塚秀高「嘉靖定本から萬曆新本へ―熊大木と英烈・忠義を端緒として―」(『東洋文化研究所紀要』第一二四冊、七九〜一三四頁、東京大學東洋文化研究所、一九九四年三月)八。
- (20) 容與堂本は『古本小説集成』(上海古籍出版社、一九九〇〜九四年)に依據する。
- (21) 小松謙『中國歴史小説研究』(汲古書院、二〇〇一年)第七章「詞話系小説考―『殘唐五代史演義傳』を糸口に―」(初出は『東方學』第九五輯、六四〜七八頁、一九九八年一月)五。
- (22) 莊宏誼『明代道教正一派』(臺灣學生書局、一九八六年)。
- (23) 杜潔祥主編『道教文獻』(丹青圖書、一九八三年)第二・三冊、清乾隆五年刊道光十二年修補本影印。
- (24) 田仲一成『中國祭祀演劇研究』(東京大學出版會、一九八一年)第一篇第五章、同『中國巫系演劇研究』(同上、一九九三年)など。
- 本論文は、平成三十一年度科學研究費助成事業・若手研究・課題番号一八K一二三二〇「明代武官を中心とした社會的異種階層間の文學的交流の研究」の成果の一部である。